ISSN 1880-1412

千葉県立中央博物館分館海の博物館ニュースレター

いそっぴ通信 No.8

（平成18年度版）

The Newsletter of the Coastal Branch of Natural History Museum and Institute, CHIBA

No.8 (1 April 2006–31 March 2007)

千葉県立中央博物館分館 海の博物館

はじめに

千葉県立中央博物館分館海の博物館は、平成11年の開館以来8年にわたって活動を続けてきました。今年度も様々な出来事がありました。

このニュースレター「いそっぴ通信」は、当館の1年間の活動の成果をまとめた物です。展示や野外観察・講座などの一般の皆様に体験いただける活動や、博物館のバックボーンである資料収集や調査研究活動など、多岐にわたる活動を行っていることがお分かりいただければと思います。

平成18から19年度を境に、分館長をはじめ3名のスタッフが入れ替わり、海の博物館にとって大きな転換点を迎えます。また、千葉県の県立博物館全体をとりまく状況も大きく変わって来ています。これからどのような変化が起きるにせよ、私たち職員一人一人はこれまでと変わらず、よりよい博物館づくりのための活動を続けていきます。今後も皆様に愛される博物館であり続けたいと思います。

目　次

平成18年度のトピックス

カズハゴンドウの集団座礁 …… 1

県立長生高校の生徒によるヤドカリの研究 …… 1

平成18年度マリンサイエンスギャラリー
「アサクサノリ　～ノリの自然誌～」 …… 2

平成18年度収蔵資料展
「大きい貝・小さい貝」 …… 3

平成18年度の活動記録

1.展示活動 …… 4

2.教育普及活動 …… 8

3.資料収集活動 …… 14

4.調査研究活動 …… 17

5.事務室から …… 21

職員から …… 23

平成19年度の行事案内 …… 24

表紙の解説：アサクサノリ *Porphyra tenera* Kjellman

内湾などの河口付近に広がる干潟に生育するノリの一種で、ヨシの茎などにつきます。乾海苔の原料として江戸時代から養殖されてきましたが、最近ではほとんど養殖されなくなるとともに、生育地が減って絶滅危惧種になっています。マリンサイエンスギャラリー「アサクサノリーノリの自然誌ー」では生きたアサクサノリを展示しました。

カズハゴンドウの集団座礁

平成18年3月上旬、長生郡一宮町東浪見海岸に約100頭のカズハゴンドウが集団座礁（マスストランディング）した様子は、ニュースなどで大きく報じられました。この座礁の原因については、国立科学博物館で科学的な解析がなされ、その成果は当館でも「国立科学博物館コラボ・ミュージアム in 千葉イルカの集団座礁を科学する―一宮町におけるカズハゴンドウのマスストランディング―」として、平成18年9月20日（水）から11月2日（木）までの間展示されました。ここでは、カズハゴンドウの等身大レプリカや骨格標本、地元サーファーが座礁の様子を撮影したビデオ映像、座礁の原因を考察したパネルなどを通して、千葉県内で初めて起こった鯨類の集団座礁を紹介しました。この展示はのべ5,642人の方にご覧いただきました。

県立長生高校の生徒によるヤドカリの研究

平成17年に行われた県立長生高等学校理数科とのサイエンス・パートナーシップ・プログラムにおいて、班別課題研究としてヤドカリの観察を行った生徒が、興味深いことを発見しました。ヤドカリを生かしたまま貝殻から出す方法として、蒸しタオルが有効であるということです。事業終了後も同校の有原千香子教諭の指導のもと、生徒たちは当館で飼育していた大型ヤドカリを使ってデータの収集を続けました。その成果は、平成18年9月に島根大学で開催された（社）日本動物学会第77回大会の「高校生による研究発表」においてポスター発表されました。また、千葉県生物学会の刊行物「千葉生物誌」において論文として公表されました。彼女らが見つけたヤドカリの取り出し方法は、今後の博物館活動において大変有益なものとなりそうです。

島根大学でポスター発表をした県立長生高校の
中島愛実さん（左）と荻　結香子さん（右）

出版された論文

荻　結香子・中島愛実・栗原万里奈・大沼琴香．2006．ヤドカリを貝殻から出すための蒸しタオルの有効性．千葉生物誌，56(1): 19-23.

平成18年度マリンサイエンスギャラリー
「アサクサノリ　― ノリの自然誌 ―」
平成18年12月23日～平成19年4月8日

私たちになじみの深い食材であるノリ（海苔）は、江戸時代から養殖され、その乾海苔製品は、江戸浅草あたりで売られたことにより「浅草海苔」という商品名で呼ばれていました。明治になって、その原料のノリは、ひとつの新しい種類だということがわかり、そのものずばり「アサクサノリ」という種名が付けられました。その後、第２次世界大戦後に、スサビノリという色が黒く製品に適した別の種類がノリ養殖に用いられるようになり、製品が赤みを帯びるアサクサノリはほとんど養殖されなくなるとともに、その生育場所である内湾の河口などに広がる干潟が埋め立てなどで減少したため、現在ではアサクサノリは絶滅危惧種になってしまいました。

18年度マリンサイエンスギャラリーでは、このようなアサクサノリの簡単な歴史を皮切りに、4つのコーナーと1つの写真展で、アサクサノリをはじめとする「ノリ」という生きものの詳細について紹介しました。

「アサクサノリってどんな生きもの？」

ノリは、紅藻類という赤っぽい色をした海藻の中の「アマノリ属」という小さなグループに属する種類の総称です。日本産のアマノリ属には、アサクサノリをはじめ28種類が知られています。ノリは1枚の葉っぱのような単純な形をしており、種類を見分けるのが難しいグループです。このコーナーでは、海藻について簡単に説明した後に、アマノリ属の種類を分ける特徴を説明し、日本産28種類のノリを標本や生体などで紹介しました。

「アサクサノリの生活」

アサクサノリの葉っぱのような体（葉状体）は、毎年晩秋から初春にかけて見られますが、その他の季節には見られません。実は、春から秋にかけては糸状の小さな体（糸状体）になって、しかも貝の殻などにトンネルのような穴をあけて、その中に潜り込んで生きているのです。このコーナーでは、糸状体が貝殻の中に入り込んでいる様子を顕微鏡などでご覧いただきました。また現在では、糸状体を使って網にノリの胞子を付ける方法でノリ養殖が行われていることも紹介しました。

「絶滅のおそれのあるアサクサノリ」

アサクサノリは、生育場所である内湾などの河口周辺に広がる干潟が埋め立てなどで減少したことにより、現在では絶滅危惧種となっています。このコーナーでは、最近までの調査で判明したアサクサノリやその他の絶滅危惧種のノリの生育地やその特徴について、ビデオなども交えて紹介し、アサクサノリを絶滅させないためにはどうしたら良いかについても提言しました。

「ノリと遊ぼう」

ノリに親しんでもらうため、ノリの名前を当てるクイズや、ノリの成長を観察するコーナーなどを設置しました。クイズは大変な人気で、答え合わせまでしてくださった人に差し上げる予定の絵はがきが、最後にはなくなってしまいました。

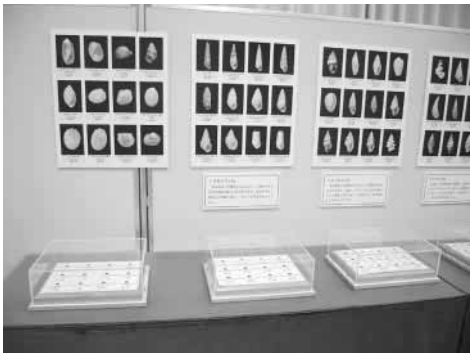
「復活！アサクサノリ養殖」

現在ではほとんど養殖されていないアサクサノリですが、その復活を試みている千葉県木更津市のノリ養殖漁師さんたちのこの冬の取り組みを写真展で紹介しました。併せて、アサクサノリで作られた乾海苔も展示しました。

今回の展示を通して、多くの方に「ノリ」という生きものを実感していただけたものと思います。「海苔」を食べるときには、そんなノリたちのことを思い浮かべていただければ幸いです。

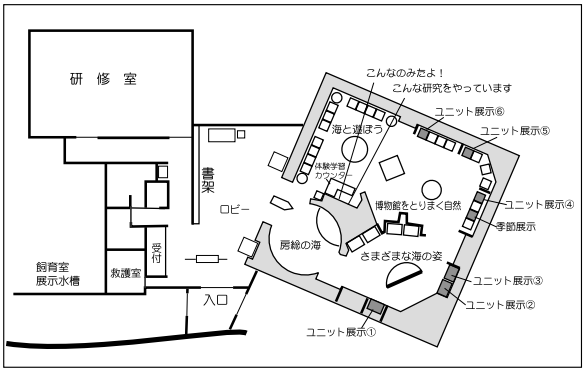
平成18年度収蔵資料展
大きい貝・小さい貝
平成18年7月15日～9月18日

海の生きものの中でも私たちに馴染みの深い貝類は、殻の大きさ・色・形などがきわめて多様性に富んでいます。今年度の収蔵資料展「大きい貝・小さい貝」では、当館の収蔵する貝類の標本を中心に、バラエティーに富んだ貝の世界をご紹介しました。「大きい貝」のコーナーでは、世界最大の二枚貝のオオジャコガイをはじめとする約50種の大型貝類をご覧いただきました。「小さい貝」のコーナーでは、成長しても数mm以下のいわゆる微小貝のなかま約130種を拡大写真と共に展示しました。アンケートにお寄せいただいたご意見では、「小さい貝」に興味を持たれた方が多く、中でも大きさ1mm以下の貝を顕微鏡で観察するコーナーは特に人気が高かったようです。



1．展示活動

海の博物館では、常設展示やマリタイムシネマの上映、マリンサイエンスギャラリーや収蔵資料展の開催などを通して、房総半島をとりまく海の自然を紹介しています。



(1) ユニット展示、季節展示、自然観察エリアの展示交換

ユニット展示

場所	交換前のタイトル	交換後のタイトル	交換日
④	北限の植物	海辺のアジサイ・山のアジサイ	平成18年 4月 9日
⑥	貝の舌の秘密	エビ・カニ・ヤドカリは親戚	平成18年 5月31日
③	サンゴと褐虫藻の共生	館山海底谷	平成18年 7月 1日
②	南の海からやってくる魚たち	サンゴと褐虫藻の共生	平成18年 9月22日
⑤	巻貝に生える海藻	他人のそら似	平成18年11月 1日
⑥	エビ・カニ・ヤドカリは親戚	わが家は他人	平成18年12月 8日
③	館山海底谷	南の海からやってくる魚たち	平成19年 2月 9日
①	カジメ海中林	カジメの根元にすむ生きもの	平成19年 3月 7日

季節展示

春のトピックス「博物館のまわりのカタツムリのなかま」

「博物館をとりまく自然」のコーナーでは、それぞれの季節に博物館のまわりで見られる生き物を紹介しています。このコーナーでは、その時期に実際に見られる昆虫の標本や植物の写真と、各季節のトピックスを展示しています。

自然観察エリア

海の博物館周辺の自然が展示室とリンクしていることが、当館の特徴のひとつです。周辺の自然のうち、特に博物館前の磯と鵜原理想郷を自然観察エリアとして皆さまに紹介しているため、定期的に調査を行っています。これらのエリアの最新情報は展示室のホワイトボードで紹介されており、これをご覧になったお客さまが自然観察エリアガイドマップを持って理想郷散策に出発されることは少なくありません。

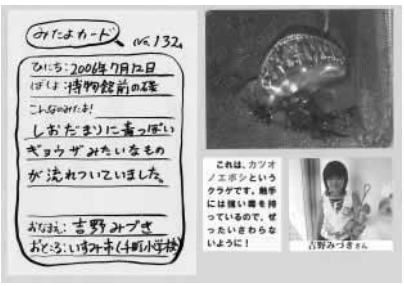
ヤマユリ

イソギク

ツワブキ

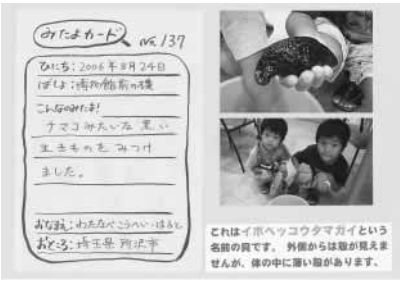
(2) こんなのみたよ！

このコーナーでは、来館者や地元の方から寄せられた生きものの情報を「みたよカード」という形にして紹介しています。博物館前の磯で気になる生きものを見つけた小学生は現物を持ってきてくれます。その際、スタッフが生きものと本人の写真をとってカードにします。また、まったく別の場所の情報をメールと添付写真で送っていただく場合もありました。特にエリアに制限はありませんので、海で気になる生きものを見つけたときには、ぜひ博物館へご一報ください。

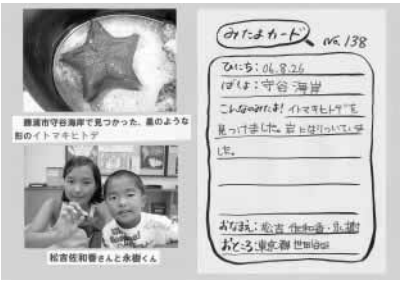


みたよカード No. 132
カツオノエボシ

みたよカード No. 133
キタマクラ



みたよカード No. 137
ベッコウタマガイ



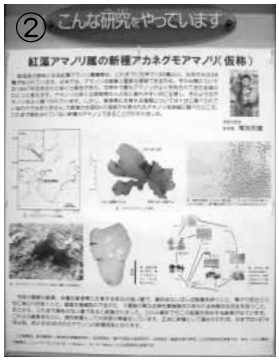
みたよカード No. 138
イトマキヒトデ

平成18年度に紹介した話題			
131	ミズカマキリ	136	イトマキヒトデ
132	カツオノエボシ	137	イボベッコウタマガイ
133	キタマクラ	138	イトマキヒトデ
134	オミナエシダカラ	139	シマヘビ
135	イソバナ	140	タコブネ

（数字は開館時からの通し番号です）

(3) こんな研究をやっています

海の博物館では、8名の研究員がそれぞれの専門性を活かして調査・研究を行っています。その成果は、各学会での発表や学術論文として公表されますが、一般の方の目にはとまりにくいものです。そこで、このコーナーでは、それぞれの研究内容を、写真をふんだんに使ってわかりやすく展示しています。



①「千葉県産ヒゲナガモエビ属の分類学的研究」（奥野淳兒）
②「紅藻アマノリ属の新種アカネグモアマノリ（仮称）」（菊地則雄）
③「海の博物館前の磯で微小貝を調べる」（立川浩之）